３日目：釜石市・宮古市での被災地状況視察、被災地高校生との交流活動

３日目は、釜石鵜住居地区、宮古市田老地区の２カ所の被災地区の視察を、A・Bの２グループに分かれて交互に行いました。事前研修の講義を、実地で体験することになります。午後には、Aグループは宮古工業高等学校、Bグループは釜石商工高等学校の生徒との交流活動を、それぞれ行いました。朝から晴天、最高気温34.2度という真夏日でした。

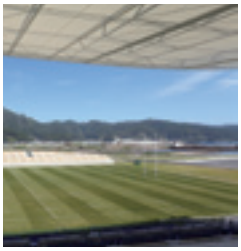
被災地状況視察　釜石市鵜住居地区

防災士養成講座［10］「避難と避難行動」

釜石鵜住居復興スタジアム（鵜住居小学校・釜石東中学校跡地）➡当時の避難経路

講師／岩手大学大学院教育学研究科　准教授　森本 晋也氏

鵜住居地区の視察は、事前研修の森本先生の講義に即して行われました。スタート地点である2019年ラグビーワールドカップ開催予定の釜石鵜住居復興スタジアムは、鵜住居小学校と釜石東中学校の跡地です。商店街や住宅も並ぶ地区の中心地でしたが、津波によって両校とも屋上まで浸水したまさにその場所で、先生と震災当時に釜石東中学校２年生だった沼崎健氏に、当時の状況を振り返っていただきました。



スタジアムを出た参加者は、実際に小中学生が避難した道をたどり始めました。まず第一避難場所のグループホームございしょの里に向かい、小学生二人の手をつないで走ったという沼崎氏のお話を伺いました。

到着後、点呼中に住民のおばあさんに「そこの崖が崩れたのは初めて。ここも危ない。」と言われ、皆一緒に第二避難場

所の山崎デイサービスセンターへ走りました。しかしそこへも迫り来る黒い壁が見え、それが津波だと気付いた瞬間、すぐに走り出しました。

その日、子供たちが津波に追われて必死に走った山道を、参加者も実際に駆け上りました。当時はうっそうとした山道だったという、急勾配な坂です。迫り来る津波を想像しつつ、猛暑の中を息を切らせて走りきりました。

最後に到着したのは、石材展示場です。身をもって避難行動を追体験した参加者たちに、訓練の大切さが語り掛けられます。「避難訓練をしていなかったら、パニックになって逃げられなかった。」と言う沼崎氏に続き、森本先生が締めくくられました。

「事前の準備が全て。想定を超えることは十分にあり得るが、本当に大切なものは何か、常に考えておきたい。特に防災士を目指すあなたたちは、何よりも皆の命を守るため、そこを真剣に考え、社会のために勉強してほしい。」

心身ともに参加者たちに深く刻まれる、貴重な体験となりました。

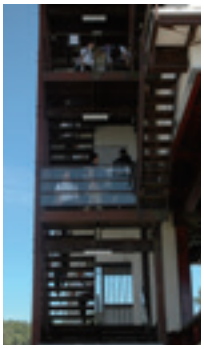
岩手大学 准教授
森本 晋也氏

岩手大学4年
沼崎 健氏

被災地状況視察　宮古市田老地区

たろう観光ホテル➡新防潮堤

参加者がまず向かったのは、震災遺構であるたろう観光ホテルです。津波の衝撃で鉄骨のみになった低層階を抜けて外階段で６階へ上がり、元の客室で、宮古観光文化交流協会ガイドの元田久美子氏、佐々木純子氏から被災時の状況を伺いました。



今は更地を工事車両が行き交うこの場所も、かつては民家が建ち並び、600 人ほどの住民が穏やかに暮らしていました。震災当日は、津波警報の発令後に停電で情報が途絶えましたが、ホテル正面の防潮堤の方が第一報より高かったため危機感はなく、念のためと従業員と社長の家族が裏山の避難場所へ向かいました。社長一人がホテルに残り、この６階から津波の様子をビデオで撮影していました。軽い気持ちでしたが、みるみる迫る津波に思わず腰が抜けて気を失い、その後は覚えていないそうです。

「天井が映し出された時が、津波がホテルを襲った瞬間。この映像は外部には出していません。この場所で見ていただくことに意味があると思うのです。」と元田氏は語ります。ホテルの前を歩くお年寄りに社長が逃げるよう叫ぶ、４分間の生々しいビデオを始めとした映像に、参加者は沈痛な面持ちで見入っていました。

それから１階へ降り、続きを伺います。津波は、防潮堤を越えて裏山にぶつかり、反動で戻ってきて３階部分の壁を突き抜けました。基礎部分に比べて壁が弱かったため、現在の姿で残ったようです。床も天井も跡形なく、曲がった鉄骨だけが残された凄惨な姿が、津波の威力を物語ります。

その後、新防潮堤へ移動しました。旧防潮堤を基礎に築かれた新防潮堤は海抜14.7 m、下の黒い部分が旧防潮堤です。上がると町が一望でき、基盤産業の水産加工場や、地域の心の拠り所となった野球場、高台を中心に再建された公共施設や住宅など、復興する町の様子をつぶさに説明していただきました。

「災害は忘れた頃にやってくるのではなく、人が忘れるから災害になる。それを絶対に心に留めておいてほしい。」という元田氏の言葉が印象的でした。

宮古観光文化交流協会　学ぶ防災ガイド
元田 久美子氏　　佐々木 純子氏

被災地高校生との交流活動　岩手県立宮古工業高等学校　Aグループ

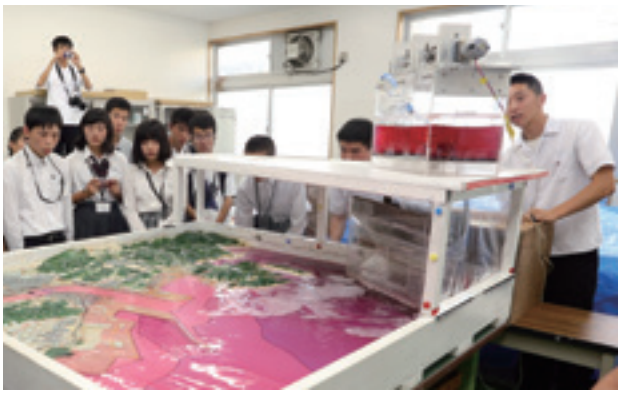
Ａグループが訪問した宮古工業高等学校では、専門性を生かした津波の研究を行い、広く発表しています。同世代の彼らの活動に、参加者は興味津々で臨みました。生徒会長を始めとした生徒の皆さんの出迎えを受けた後、２グループに分かれて発表や実演を聴講しました。

同校の機械科津波模型班では、震災の記録を残し、今後の防災に役立てようと「津波実演会」を開催しています。今回で 169 回目になるこの会は、津波模型を用いた出前授業も実施しており、関西・四国でも実演したほか、功労者防災内閣総理大臣賞などの受賞歴も誇るそうです。津波模型は宮古に続き仙台湾や高知県須崎市のものも製作し、地元の学校へ寄贈されたようです。

まず、スライド発表がありました。地震や津波のメカニズムや世界での発生状況、さらには三陸での特性や〝津波てんでんこ〟に至るまで多彩な研究内容に、参加者たちも真剣に聞き入っていました。

その後、別教室での実演に移りました。2,500 分の１で製作された津波模型は、宮古市の建物や道路が精巧に再現されています。装置を動かすと、遠心力により河口付近で高さを増した津波が、堤防を越えて生活圏内に浸水する様子、閉伊川を遡上する様子が、よく分かります。津波については様々な角度から学習してきた参加者も、こうした新しい視点に気付かされました。

続いて同校の津波被害の状況が、パネルで説明されました。湾から直線距離で約１km の同校では、生徒や教諭のほか避難してきた近隣住民も含め 200名近くが、周囲の浸水で孤立してしまいました。暖房もなくカーテンを外して寒さをしのぐような困窮した状況で、工作部が製作したエコカーの型枠を小型船に改造し、住民を救助したというエピソードが、胸を打ちました。



最後に、参加者に向けて「皆が助かるよう、私たちはこれからも活動を続けていきます。今日の話を周囲の人とも共有し、ぜひ日頃から訓練を行い、避難の仕方を身に付けてください。」というメッセージが送られました。

先生からも「今回の活動を通じ、皆さんの中から数多くのリーダーが出てくれることを期待しています。」との言葉があり、身の引き締まる思いの参加者たちでした。

被災地高校生との交流活動　岩手県立釜石商工高等学校　Bグループ

釜石商工高等学校に到着したＢグループがまず案内されたのは、階段教室「はまゆりホール」でした。生徒会副会長・秋元瑞希さんの開会の言葉に続き、生徒会長・秋山仁美さん、村上則文校長の挨拶があり、宮古市の震災時の映像が上映されました。

続いて大会議室へ移り、グループワークを行いました。８班に分かれ、各班に同校生徒が加わり、地震・火災に対する対策、地震・津波に対する対策の２テーマから一つを選び、班ごとに議論を進めます。

まず当時小学生だった同校生徒から、震災時の実体験、大人にしてもらったことを話してもらいました。火災について「水がなかったので海水を掛けたが、消えない。流出した油を含んだ海水が火勢を増す結果になったと、後から知った。たまたま降った雪で鎮火したが、消火よりも逃げて自分を守ることが大切だったと思う。」といった詳細な体験談が語られていました。

それを踏まえた意見交換の内容を、模造紙に３色の付せんを貼ってまとめていきました。自分たちにできることは青、ちょっと無理なことは赤、どちらか判断できないことは黄色の付せんに書き込みます。最後に１分程度で話し合った結果を発表しました。

どの班でも活発に意見が交わされ、中には議論に熱中するあまり内容のまとめが間に合わず、臨機応変に口頭発表へ切り替えた班もありました。

発表では、高校生には難しいこととして、蘇生などの応急措置、物資の調達、避難所の運営、できることとして、周囲への声掛け、小さな子供の避難誘導、体が不自由な人の避難補助、周囲に大人がいても自分たちが率先避難者となる、物資の運搬、食糧の確保と自炊、けがの応急処置などが挙げられ、要配慮者への配慮や、積極的な避難をという見解が多く見られました。また、鵜住居での視察から「地震と津波では避難場所が違う、実際の避難場所に逃げる訓練が大切である。」と、今回の知見を体得した意見も出ていました。

参加者からは「実際に被災した方々のお話を伺う中でも、同世代の皆さんと勉強できたのは貴重な体験だった。」と感謝の言葉が伝えられました。

宿泊研修１～３日目の振り返り

三陸花ホテルはまぎく

講師／一般社団法人おらが大槌夢広場　代表　神谷 未生氏

被災地高校生との交流を終えた夜、宿舎で３日間の振り返り学習が行われました。ファシリテーターの神谷氏が「様々なことを見聞きし体験した中で、心を動かされたこと、記憶に残ったこと、忘れてはならないと思ったことを、今から棚卸ししましょう。」と呼び掛けます。自分に足りないスキル、東京で災害が起きたらすべき行動などを〝学び / 体験・スキル / そなえ〟に分けて考えることになりました。

１時間に渡って各班で盛んに意見が交わされた後、手を挙げた六つの班が発表を行いました。〝学び〟として「自分の命は、他人には預けない。」「自分が逃げないと安心した周りの人も死なせる。」「震災当時の話では、どなたも言葉を詰まらせた。心に負った傷跡が言葉や思いで伝わってきた。」、〝体験・スキル〟では「助かった学校は奇跡の学校ではなく、やるべきことをやったから助かった。」「３m以上という津波警報で、かえって犠牲者が増えたことを知った。情報に縛られてはいけない。」「震災から復興するのには長い時間が必要だと知った。」、〝そなえ〟では「サイレン等の前に行動する。」「近所の人とコミュニケーションをとる。復興時に大切になる。」「パニックにならないよう、日頃から災害をイメージする。」「自分の町を愛し、避難経路や過去の災害について知る。」といった、研修の成果がうかがえる意見が出されました。

最後は「核になるのは、生きる覚悟。東京に帰ったら笑顔で『ただいま。今までありがとう、これからもよろしく』と伝えてほしい。家で待つ人がいるという無意識の大前提が、皆の幸せの原点であり生きる覚悟につながる。防災士を目指す原点にもなる。」という神谷氏の心のこもった言葉で締めくくられました。

参加者の感想（宿泊研修３日目）

●釜石市鵜住居地区　被災地状況視察

当時、実際に避難した方から直接話を聞いたことで、避難訓練の大切さに気付いた。	生徒
たくさんの避難経路を試行錯誤して津波に備えていたことが分かった。避難を計画し、教育することで積み重ねて対策を行ったことで、間一髪で命を守ったことを学んだ。	生徒
避難経路をたどり、急な斜面でとても体力を消耗したが、震災時には私たち高校生よりも体力の少ない高齢者や幼い子供たちも避難することになる。その場でサポートに回ることができる状況なら、しっかりサポートして共に避難しなければならない。また、瞬時に現状を判断し行動できた中学生たちには、生きる覚悟があったのだろうと思う。	生徒
釜石の奇跡と呼ばれた道を実際に歩いたことは大きな財産となる。専門家が主導する訓練などいかに日頃からの積み重ねが大事なのかを学ぶことができた。	教員

●宮古市田老地区　被災地状況視察

生きていればいつか必ず会える。生きていれば希望になるということに気付かされた。災害時に生きるためにはどうすればよいか、これから考え続けたい。	生徒
語り部の方が、「震災前は祖父母から聞く戦争や地震の話はしつこくて、少しうるさいなと思っていたけれど、震災後はきちんと聞いておけばよかった。」と語っていたのが印象に残った。	生徒
避難において、１分１秒が生死を分けるため、自分で考える力も大切だと再認識できた。	生徒
避難道も充実しており、防潮林、防波堤、碁盤の目状の道など、防災に特化したような町であったのに、住民は大丈夫だろうと思って避難しなくて流されてしまったと聞いて、改めて避難することの大切さを学んだ。	生徒
偉い人がいても、集団同調バイアスに逆らう「ここで本当に大丈夫なのか。」と発言する姿勢が重要であることや、エキスパートエラーがあることを前提とし、専門家の情報をそのまま受け取らないことが大切であることを学んだ。情報を基に、どのように行動すべきかしっかり判断したい。	教員

●岩手県立宮古工業高等学校　交流活動

被災地ならではの研究や結果で、関心深く聞いていた。自分の高校ならではの研究をしてみたい。	生徒
高校生が作成した模型は、津波がどのように町を襲ったのかを上から観察することができたので、非常に分かりやすかった。	生徒
一つ一つの説明が丁寧であり、宮古工業高等学校の生徒の真面目さや素直さが伝わってきた。	教員

●岩手県立釜石商工高等学校　交流活動

私に東日本大震災の実感がなかったとき、同年代の人が友達と避難して、壊れる街を見て、家族を亡くしていたなんて分からなかった。それほど過酷な現実があるとは知らなかった。	生徒
高校生が積極的に避難所の運営をすることが重要であると感じた。	生徒
生徒にとって、同年代の人から聞く話は有意義なものになったと思われる。まさしく、主体的・対話的で深い学びであった。	教員